里見八犬傳

第壹輯　巻之五

南總里見八犬傳　巻之五

東都　曲亭主人編次

第九回

盟誓を破りて景連両城を囲む
戲言を信て八房首級を獻ず

却説安西景連は義実の使者たりける金碗大輔を欺き留めて。おのゝ
おのゝびゝ軍兵を部ゝ。俄ゝ里見の両城へ牛ごと推寄せり。その一隊は二千
餘騎景連みづからこれを率ゐて滝田の城の四門を囲み昏夜をこゝろゝこれを
攻むゝその一隊は一千餘騎安房戸納平太紙大郎ふく堀内貞行が竜ゝる東
條の城を囲せ両城一時ゝ攻潰さん。といやがうへまで攻登る。その緯のゝ体
稲麻の風ゝの戦ぐ如く勢ひさきく破竹ゝ似ゝり。このとゝ里見の両城ゝ兵糧
甚ゝ乏ゝ民荒年の役ゝ労ゝて。催促ゝ後ゝ只ゝ日を待ゝるのゝこゝろの至ゝ

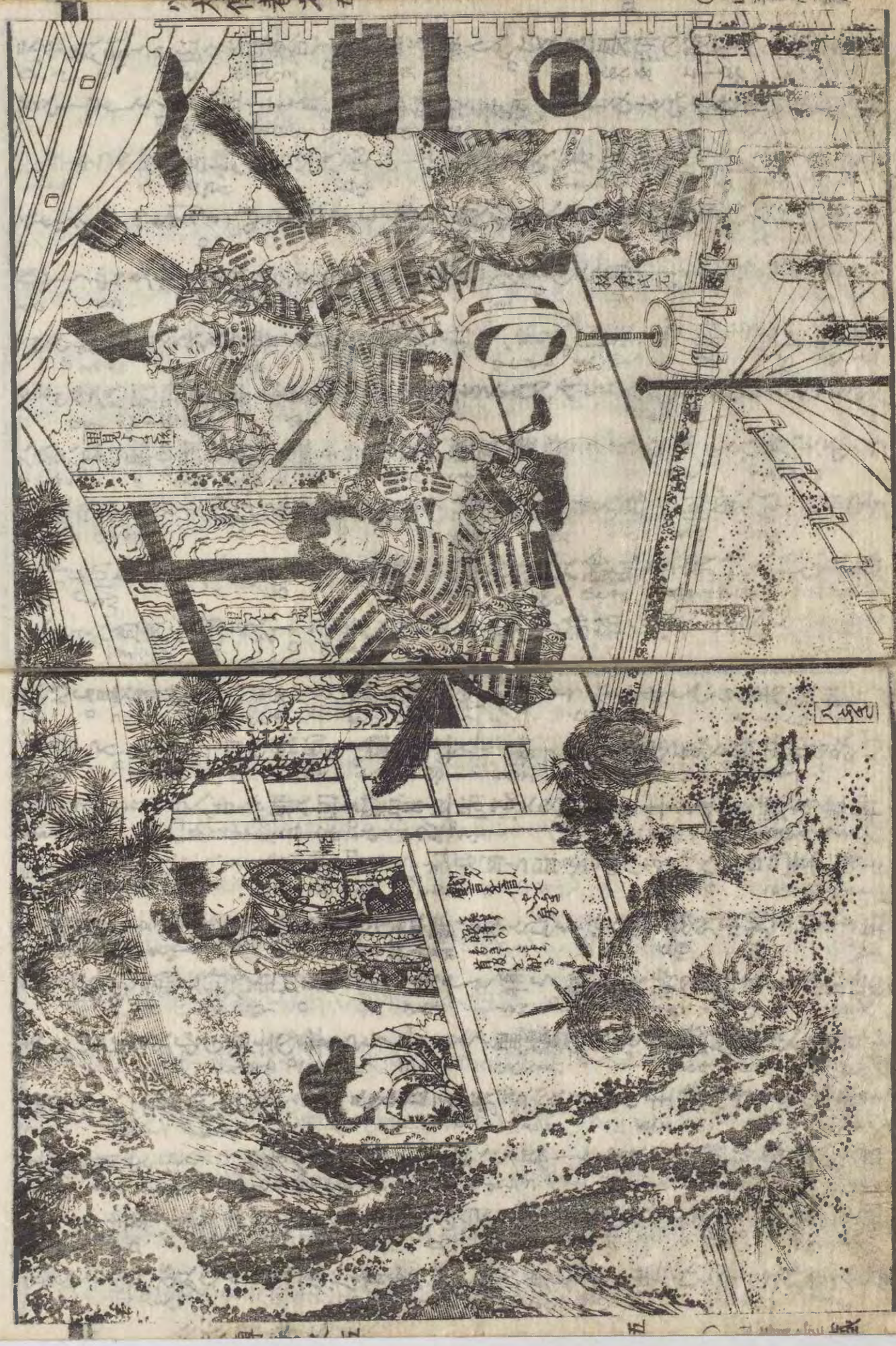
恩義の為に命を軽じ寄る弦屑とも世ざる男士猛卒なる死はあらず。
ときく陸戦のうち主客の勢ひ異ゆーくて兵粮は竭ーば食せざる
ること七日に及べり士卒ハわとく堪えがたく夜ひそかに城を踰て潛出射殺されし
敵の死骸の腰兵粮を捞取て僅に餓を充ハ馬を殺して死人乃
肉を食ふものあり義実いくことれを患ひて枚倉木曽の氏元ホのろくの士
卒弦聚合させて宮ふせう景連ハ表裏の氏士盟を破て義に違ん奸邪ハ今
さらいふまでもなくどさのをおそろく敵ゆハあくまで彼両郡の衆弦ねがくこが
両城を攻撃ばこと三郡の衆をひく彼が二郡の衆に倍ふ勢や十二分に
勝るとも千角の軍ハ去ればよこぶ徳ぶらぶ五穀登らぬ内に倉廩
空しく外ゆハ仇の大軍あり甲乙いまだ決せざるに緩
百樊曾あるといふとも餓ては敵弦防ふよ〜迚只義実がいとんみ

とろの衆弦ひくこの城中にありとある士卒弦殺さるゆ為びに今宵衆
皆鳥夜に乗て西の城戸より走出ん辛く命を全せん。その時城に
火弦放て且ハ妻子を刺殺し義実ハ死とゞ死なり。二郎太郎ゆとく
義よ。その術ハ箇様こと精細に示しゆくば衆皆こを弦従ひあくば従ひ従ひ
ひへども。それ禄を受て妻子を養ひ難に臨て苟且にも曙ては要せば
只頭身の息の内に寄ゆの陣へ夜撃ひて名ある敵と刺ちゞ君恩報泉
下に報せんこの餘のうハ為だにうゆ願ーくばいと辭ゆとく回合せうとと
義実ハうの用叮嚀に説諭ーたくども兼引乱色なりけるとあと死義実の
ちん子二郎太郎義成ハ十六歳なりゆ人ひとり父の仁愛士卒の忠信に有
くれとのこうちゆのくをハせーば言果べうもあらざるハ父の乱色を
窺ひく弱冠の某が異見をやーるゆあらず後と天の時ハ地の利に

地の利ハ人の和ニあらず。城中既ニ兵粮竭く。士卒飢渇ニ逼て脱れ去らんと
ス。ものなく。併死を究めしハ徳ホ。より。思ふ所ハ只その和の致ス所歟
人の性ハ善なるべしや。寄手の軍兵ども。善悪邪正ハ去りつゝ又
兵粮ホ竭されじ。毎日ホ煙をそさせもへば。歌うまでとハ思ひうけざ短兵
急ニ攻戦ざるハ又の武勇ニおそるゝ故ニ。とのゝ。城ハ自ら敗亡ス。
なるべし。城攻ホ。寄手ホ。対ひ景連が非道の行状盟誓を破り。
恩義仇とす。不義の軍を起しゝ。その罪状責させもへば。士卒忍地慚愧
しく。攻戦ホのゝ。ろ失なん。そのとき城より発ス出ハ一揉ニ突崩さば。
勝ざとホとあるべうもざこの機ハいざひらん。と言爽ホ演もへば衆皆ハ
管感佩しく。去るべし。とまうしもゝ。義実ハ試ニ。その声を聞ス。
景連が不義を数へ。その罪状責させもへば。日来ハ声ふくしうもれを餓

て絶ス息つゝ。城櫓ハ高く堀ハ広く。腹の筋のよるまで口を張り面を
赤うして。ひだるりハ罵ども。敵の陣ハ声届ず。果ハ涙ホ。死られてかゝ。咳状
せくのこゝろ。ハ。労しくその功ろ。ほけり。さる程ニ義実ハ勅ホ脱れ去る。
士卒状救ふ。ものとるハ肺肝を摧もへと。輙く敵を退る。状況ものゝ。
凝ていハ其。ハ。ニ至ら。とく。杖を曳園ニ出。徜徉ものゝ。年来愛させもへる。
八房の犬ハ主をうらく。尾を振ゝ来ふけ。と久しく。餓ることなるとハ。
ものゝ。定ふ。肉脱て骨ハ。眼ホ。いやさ。鼻乾ス。義実ハ状
右ハ状りくその。状状拊嗚呼汝も餓る。欲ニ。ハ。
いとるゝ。ハ。ハ。汝ガ。を忘ス。賢愚その差ホ。ありとハ。ども。ハ。則禽物
の。ハ。る。状りくみる。智恵ホ。教ニ。後ハ。法度状。寺ス。礼。恩義ハ。知る
ものゝ。ハ。欲状禁ホ。情ホ。嫉。餓く死。ハ。天命時運ハ。ハ。

ノ部 ○ 二 ○ 二 ○ 二



[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぞや。中道五十余伏
勢いを追ひ追ひとなりまして。ようよう追ひ詰めひ後とのべ再びさてんと
す。そのあとを義実八さやく。とゞめ入れとるとも妨るに役のいく
人。餓ゑる隙に射ての兵隊を傷ひるば。そゞ怪ゆいさ。あれがどこ。これみゞうら
いかなるとんとのひかけくたや立ち見べ氏元ゆいかゆさえ男房女房散
動滅ぬて我ハ壕を乗て先ゆ立義ハ主の後ようなく。金りろ九ゆ縁煩投。
と件の頭式ゑる行ゆ義実ハ眉根をよせ。木曽ゆ打とろえとる。鮮血ゆ塗れ
定なるら格ど。ゆ景連ゆ仰くるゝ。洗あくえよと。御主が氏元ゆ亦弑
るゞら。浄ゆ鉢のなとりへよせく。柄杓ゆ水弐汲をうけく。頭ゆ塗ゆ血と
つく。編ら洗流ゝて主後文ゆ立弑つれば果しく。敵将景連が首級ゆ疑ハ
べうゆあらば分明るゝと宣へば。衆疑ひを解なゞらまゞその首弑ゆる
よりあるゝまゞと人ハ及ばぬ軍功ゆ只管犬を羨ゝり。當下義実嗟嘆しく。弑

奇怪ゆるゝ弑ゆる前象後兆ゆ弑ゆあらばゞ今ゝそゆひあはまるゆれ無ゆ
るゆ蜻蛉の命を捨んとゆ。ひゆ決心士卒をいそぐ救んとゆ。ひらひらゆ慰ゆて
らば勇ゆとろ。鬱ゆハ國へ生ゆるおゆ。ゆの八房がいとうう。餓ゆる弑又ゆるゆ恨ゆ
彼ゆゆ人ゆ弑ゆ憐ゆ後ゆ。寄ゆの陣へ忍び入りく景連を咬ひ殺して城中ゆ
数百の士卒を殺ゆよ至ゆば日毎ゆ魚肉ゆ飽せんとゆゝども欲ゆ乳ゆ乏ゆ
さゆらゆゆ所領ゆ宗ゆ人ゆ欲重職を授ゆ欲といゝども欲ゆ乳ゆ乏ゆさゆらゆゆハ
生平ゆ欲を愛ゆる伏姫を取らせんゆ欲といひつるゆ八房ゆ欲ゆ
乳ゆ乏ゆく。尾をあまゆく吠ゆる声常ゆハあゝでいと忌ゝ。戯言ゆ乳ゆ乏ひ
ゆゆ。生ゆゆとゆゆ乏ゆの弑慢ゆる匹。と乏ゆりゆゆく。ゆ修後堂ゆ人と
聚合嚴期の軍弑ゆ眠ゆるゝゆ。そのゆゆゆゆゆゆゆゆ犬ハ却ゆ生ゆ
ゆれ後ゆゆ指剣ゆゆ虚言ゆ実ゆゆゆく。寄ゆの陣へ潜ひ入るゆ。二三千騎の

知恩院の内に大仏殿の東の方に
三百余騎
乱入
敵軍
夜明け
城中
朝
勝利疑
大将

なるハ十重九重ゆ囲そんゝ。昏夜をこゝぞ攻寄るとも。件の城ハ滝田ゆまゐりく。そ半月の貯禄あつゝ負ゆハ敵式拂ゝて。滝田の後巻式せんとのゝ。ゝ。ゝ。

進して件の首級を獻ぜしに義実は安房朝夷のものどもを召せのぼり、物賞ぜさせ。
御曹司と氏えぶる御教書をもはべりて館の西城を守らしめ、かくてぞ四郡一不四
義實管領しもべ威徳朝日の昇るごとく。徳澤は時雨の潤すごとく。奸民は去ぬ
吾人は時を得るごとし。晨よりもまして夜戸を閉ざず又遠さる紙拾ふものは久後は卒
ちち濱小波風立さるのしるべ。このとき滝田へ書を贈りて一四平均の
倉へ立ちくるやうに年来ふるのしるべ。
功業を稱賛し室町將軍へ代のえあげて則里見義実を安房の四主ぞ
る。刺治部少輔小補せらるるよし代のそ。義実歓喜雀躍して京鎌倉へ使
者を進じ土産種々献る。持氏の孝子成氏とのいはゆる嘉吉三年小長尾昌賢執ぶ
ありて成氏は鎌倉に居るとぞ。康永の年間下総なる許我へ移住しぬ。
ちふ年序を慢まれ。この年のすゑ成氏の孫紀ふ
べ死るのこころもも続くものうら。義実はとふかくよろこばそのちぢめ安

西小糧を乞へとて彼処へ使者を遣しぬ。金碗大浦がゆえ渠は年ゆ四とし
けるとも門容ことごとを束く歓び擒とるのなりば敗まてく殺まてしかば
その勢の多少を計らず勢を拒く可惜命を損せしかばかれ
ちでも。かり系らぬるはあらじ。ゆえに不憶土地を開きさかり富を受るゆへ
彼が親の資小ゆえ。かゆえ。その臨終のその子を長狭の郡司とし東條の城
主ゆせん。といひつるゆ我ゆまぐ果さぞ加ゆ日ぶ。あろよ許せしゆさへあり
ゆの我ゆたてや渠が亡骸ぶも。ゆるよりゆ死は送臓し拝を代草と刈拂ひても
そが存立をもくせんとて豫て八方へ人を出し。さ死くまでも尋ねしめ隈なく
索さきゆと往方は絶えぬれざりけり。さる程ゆ義実は老當士率の勲功を
ひとりくゆ攻正しく。所領を増し職を進め大方なくば勸賞を行はせしゆ
るのちぢめよ八房の犬をりく。第一の功と定め朝暮の食起外の衣美を西さ

さることいまだ久しくこれを養ふ大養の職と置奴隷数冊けるに出るとこれを先を追せ
八犬と死にたる獲らせ寵愛耳目を驚かせども八房は既に低尾をふせて食ふを
聽らざいなる宵敵將景連が首級ぬりて来り縁頬のほとりを拭ふ去るを
主君の出させるを見るに縁端の前足を懸て尾をふりて鼻を鳴らす
これをもてなるのあるが如し主君とども義実はそのさまを見てうづくま
魚肉餅をもとを折敷にさしそへて賜ふけるとも八房は見向もせず求る
るの頃りに簡様のこの戯かさなるを見ば義実は大いに犬のさまを推量りて
りこれを知るとも彼を忽地愛を失ひて端近くに出るを大養ふ八房と
遠く牽のくに去らせのくを動さるに八房は咬犯ひて大養ふが後ゆを果は裾を
引断離て禁庭人を咬ひ倒し彼縁頬よりも跳登りて奥ゆ上るを彼此と
なく奔走さるとも追ふ大養ふは禪の関の戸あるべきを抗ふ

あるとよと叫ぶの三男子のひとりを来せ犬が咬犯ふるのあれば侍女們は
一斉ゆおそれ戦ひて立騒ぎ彼首へ走れば是首へ逃此方へ追へば彼方へ走る
犬のうたゆ人をひく障子蒸襖を推倒し叫び喚ひまどひ伏姫の
とりしを後堂へ追入れてこれを姫は用人もるく書紫の羽とりて
枕の草紙を御覽ずるゆ翁丸とのの犬が勅勘を蒙るまく捨らるを一緒の短文
のるさまをくり来るを姫を愛さるを書ける清少納言が才を
羨む昔はかるるのてあるとも犬とりどもつくその限絵遠くの枕侍女們
叫ぶ声しく背後へ走り来るのあるとその疾ぶるを抹る立る筑紫琴を
横ざまゆ倒しけるを裳の上へ礫と外を戦吐嗟とたりうえ人のこの是則は
房へその面魂生平なるぶ。さは病つ死るるのうんあるうるとと書紫を撞
や生ずとなるゆ犬の臥とこれ前足を長く枕を突入るを。進退特

不便なり。況や十年畜育て大犯なる主犢を捨てしく。ちゝ剛の老犬が壁を
なりとあるのみならず。こは後方を引きたてゝ頻に鳴せの人事
女小屋後女の童共もあつぱ走来つ。この為体をいとゝ怪しく驚くのを
近つ犯なぞ引提来る筆のいと。席薦を鑿ことうち敲叱ことのいとゝ
かゝるに追出さんとすれば八房は眼を瞪ら〳〵。牙を見せ跳まる形勢凄かれ。
侍女們は筆弦捨て。逡巡せぬものとなし。浩然の義実は綽々たる
けん短槍引提て来るひつ。戸口に立てあそ義ふ女の童小を叱て退けて
遽しく進み入る。安房は畜生とて生よ生よ。と引提る短槍の石突さ。
追ひ出さんとすれども八房は些も動ぬど信と向上て牙を張りまもく哮る
声凄く。嚙もからし恢勢なり。義実は勃然と怒り小屋ぞ声をふり立理を
非もなき畜生よりめいふは至益なく。とぞ愛さる主とぞ思りつゝ。あら

ぞ思ひ取り出さんと敦圉あへぎ槍とり直して突殺んとすれば伏姫は身を着は
やう結ぶ赤き大人貴犯ぬ方をいろるまぶ。牛行童小等して畜生の狂弦咎め
ぬ。弦下しあふの物体なるは何ぞ。聊ぶふるも結ぶ枉てあるさせるひ
犯。といひつゝ貝弦拭ぶ。義実は突うけて短槍を引く挾む異なる姫が諫
言なるいふ。あらばとゝ。といそぶるへば。たゞふ落る涙を禁め。頸を改めいと
憚ある。ふ結ぶと今も昔も和も漢も。かゝる君の政事。功あるは必賞あり。罪
あるは必罰あるより。功あるを賞行ぶ。罪ありて咎なくはその囲亡ぶ結ぶ
ぬ。警ばこの犬の如犯功結ぶとも賞行ぶ。罪なるして罰弦蒙る不便ゆへなり。
さぞや。といふ弦義実は。あへぎ。ぬ方が異見甚さぶり剛敵頑なる滅しより。犬の
為小職を置食ふ珠饌美味を與へ裇は錦綾羅と賜ふかくてもその賞なし
といふや。と結ぶるへば。弦搔綸言千の如しとは出てえさぬ。喻は結ぶ又君子の

搜神記

昔高辛氏有犬戎之寇。帝患其侵暴而征伐不克。乃詔募天下有能得犬戎之將吳將軍者。賜黃金千鎰。邑萬家。又妻以少女。有畜狗。其毛五彩。名曰槃瓠。下令之後。槃瓠俄頃銜一頭。泊闕下。群臣怪而診之。乃吳將軍首也。帝大喜。且謂槃瓠。不可妻之以女。又無封爵之道。議欲報之。而未知所宜。女聞以為皇帝下令不可違信。因請行。帝不得已。以女妻槃瓠。槃瓠得女負而走。入南山石室中。險絶人跡不至。經三年。生六男六女。槃瓠因自決。妻好色。衣服製裁皆有尾。其母後以狀白帝。於是迎諸子。衣裳斕斑。言語侏儒。好入山壑。不樂平曠。帝順其意。賜以名山廣澤。其後滋蔓。號曰蠻夷。令長沙武陵蠻是也。又北狗國人身狗首。長毛不衣。其妻皆人。生男為狗。生女為人云。見五代史。

とゐ家を田しあの大姫明よ。天神様と編よりの。
のおさを夏しあの大姫よりの。

ゐ。
ゐ。

ゐ。
ゐ。

ゐ。
ゐ

しゅう。ゆう。ゆう。ゆ

機さるべきにこそあらめ。と思ふ世。といひけるを聞て顧て掩ふて城の公義
実類ふうち点頭ゐ通めでくいひ是さう。遠く異邦を者ゐ高年氏の際勢ゐ
よく己ぶ今の患ゐ似さり。又寸宝が捜神記ゐ大古のとき犬人あり遠征して八
ゐ。妻ハ世をさ安りて只ゐとりいの女の子あり年ゐ二八とぬ成ぬ三ゐ名の
家ゐ牡馬あり。かくて女の子ハ旦暮ゐ親慕ゐ。件の馬ゐそちら
ひ。ゐ。ゐ。ゐ

第十回

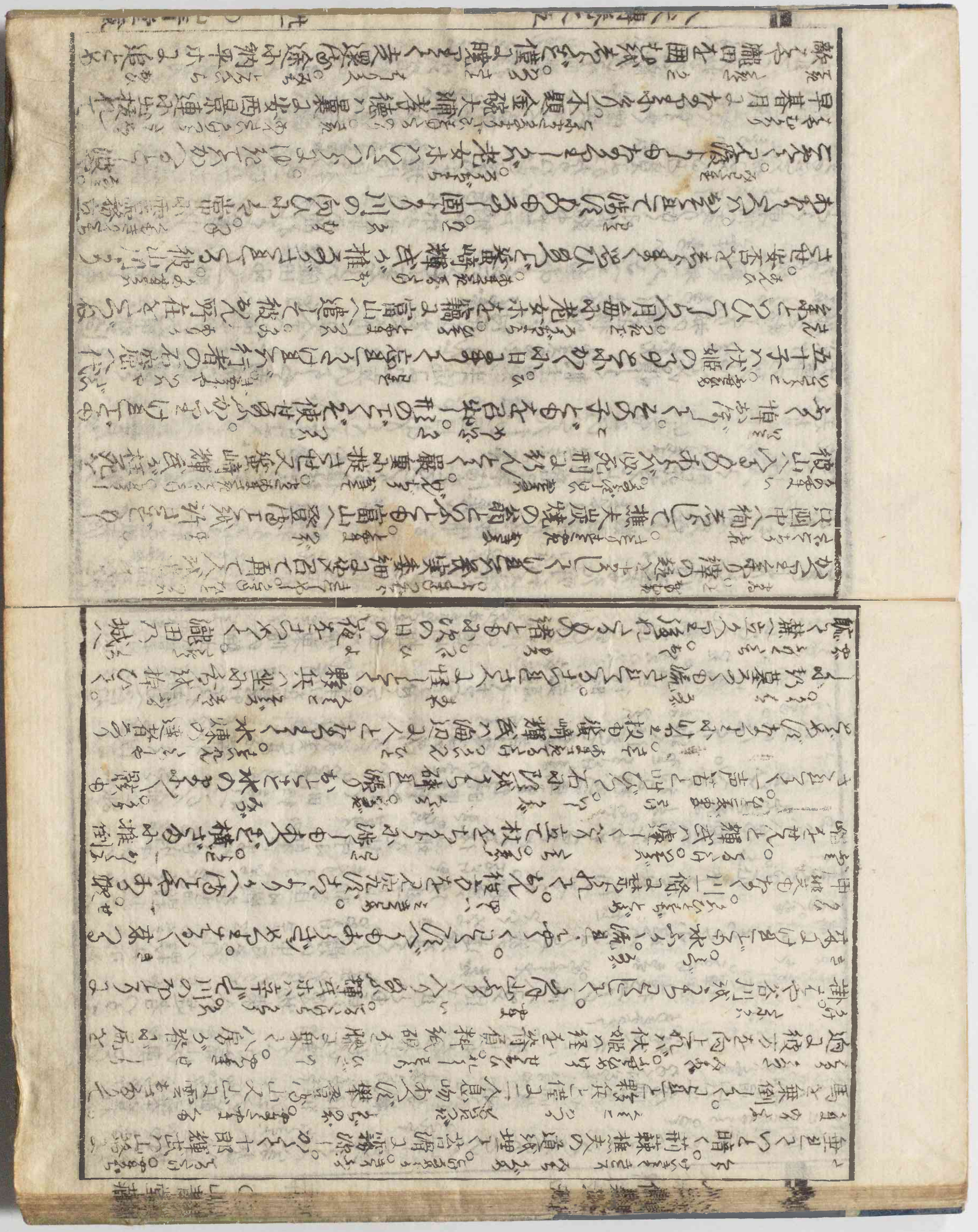
禁を犯して孝德一婦人と失ふ
腹を裂く伏姫八犬子を産とき

義実の夫人五十子八房が為体を人の告るふ驚死く。裳裾裹く遽しく伏姫のもとへまゐる子舎へたゞ来あひしがとゐんまゐれ陝まで小侍女們八戸口ふさり。治部殿義実といへもとへまゐ来ば姫ゆゑ恙るの死のくり。親子が中ゆ大を置て問答の最中へ。ゆゑの果るまでとく。竊ゆゑ潛然とうち泣てゐほとり。ゆゑ侍女們ハ出くゆく犬よりそ出てく。おりゐを左右へひら死ーくゆ。支加乃路ゆあちく。躲れ果ぐとあくぶ五ハ走り入るく姫ゆ人のほとへ撲地と伏沈て声を惜ず泣ゆゑ義実ハ愧ゆひとくうちうるのゆ扨宮ゆ伏姫ハ母乃背を拊おろし又抱おろし。縁由を問せ一狄ゆ心持ハいかゞぞと慰られて母ゆ人ハ涙を拭ひ伏ゆ涙を拭ひ伏ゆ歎せん嘯伏姫。ゆゑ恰惻く

よりゆゑ姫の御綻ゆ表裏ゆく。賞罰の道直ゆとそ名誉汚し。勇を捨ゆ。ゆゑハ父ゆ人ゆ孝行ゆゑ情ゆ悖ゆ俗ゆ背ゆゑ推ゆとれと誉ゆ生とて。ゆゑの二親ゆゑねもあらざゆ母ゆ歎ゆ況ゆ。ゆゑハ母ゆとそ病ゆ。母の苦労をかゆゑ昔ゆこゆふゆ生育ゆゑ。ゆゑ姫ハ漂致八月も花も及ばぬ美しゆ。ゆゑ物の怪ゆ。ゆゑ祭ゆ。ゆゑ神の加護佛の利益もなゆ。ゆゑ世欲と渝ゆ。ゆゑ母の慈悲ゆ伏姫ハ堪ゆ。ゆゑ涙を袖ゆ推包ゆ。ゆゑ宮へゆ不孝の罪ゆ。ゆゑ上ゆ。ゆゑ重ー親の歎ゆ。ゆゑ後ゆ。ゆゑ名を汚ゆ。ゆゑ泉ゆ。ゆゑ祭ゆ。ゆゑ命運の致ゆ。ゆゑ因ゆ。ゆゑ決ゆ。ゆゑと左ゆ。ゆゑ取ゆ。ゆゑハ幼稚ゆ。ゆゑ役行者の化

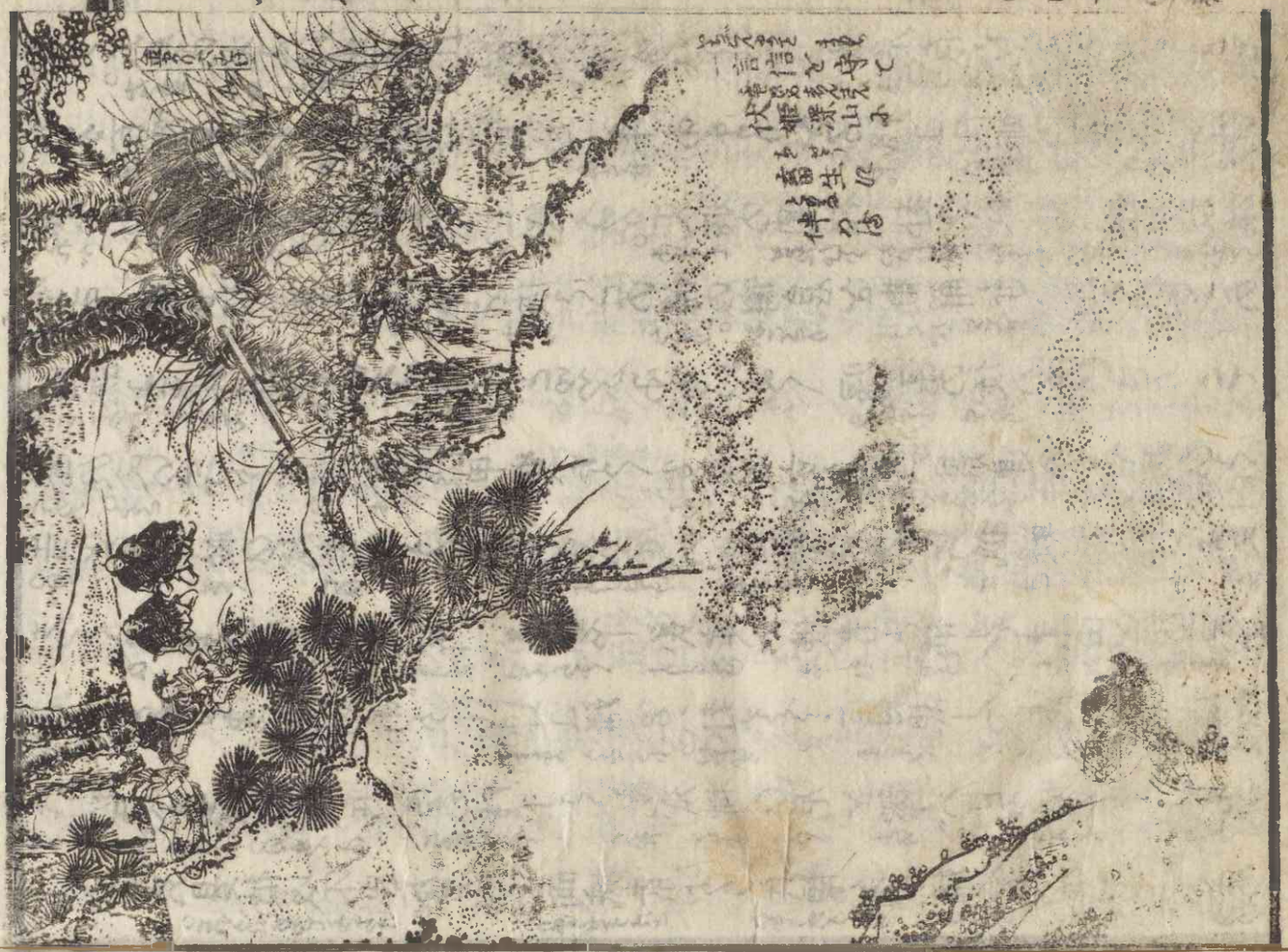
ようとしたのを、ちょうどそこへ通りかかった、同業の仲間の者が、
「どうしたのだ、どうしたのだ、」
と、声をかけると、
「いえ、なに、ちょっと、」
と、ごまかして、
「ちょっと、ちょっと、」
と、ごまかして、
「ちょっと、ちょっと、」
と、ごまかして、
「ちょっと

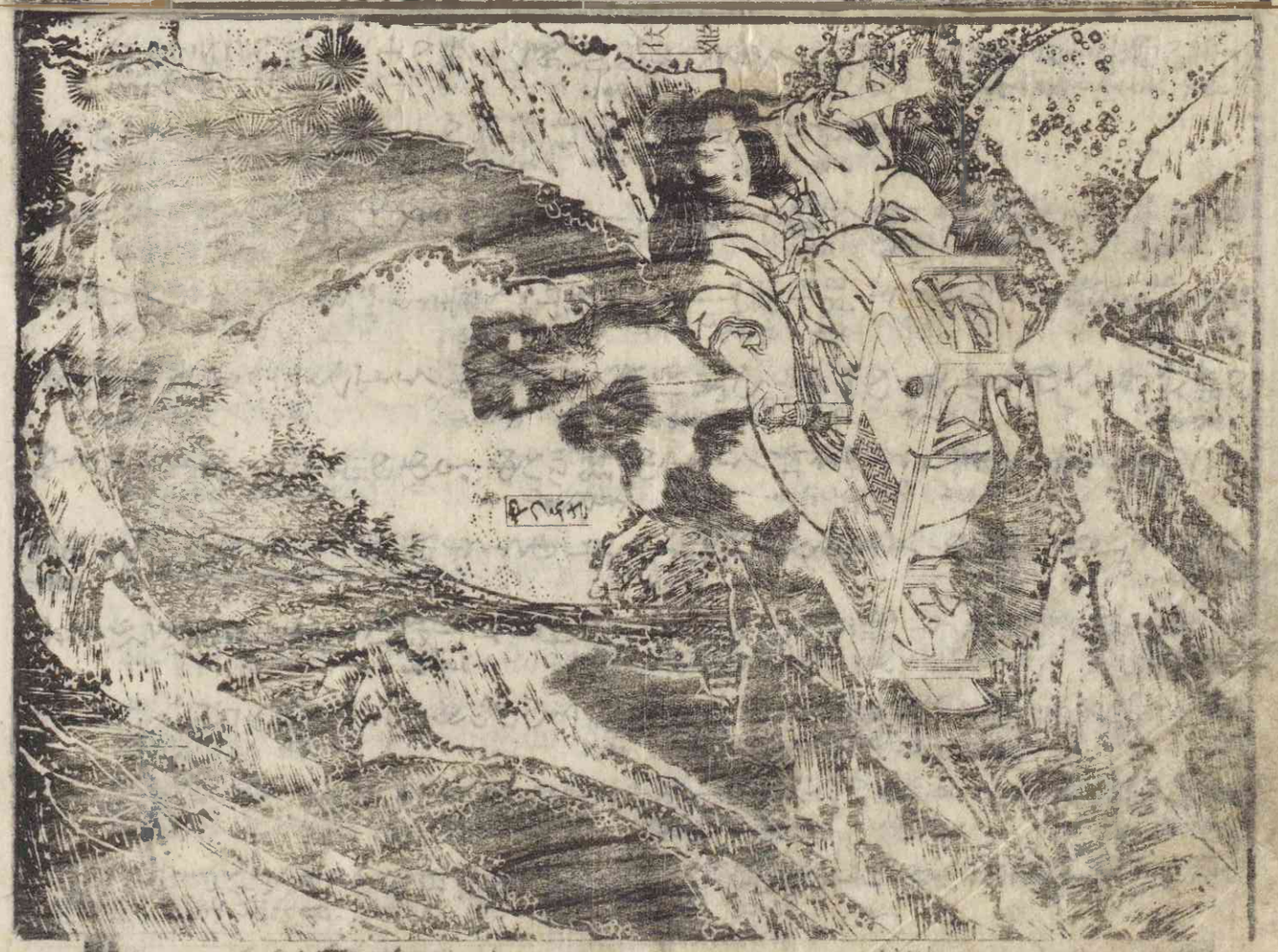
れたるものの山中にうちうしなはれぬるを。ことなる事なくて。ひとりの山中に。
ものの。ものの。ものの。ものの。ものの。ものの。ものの。ものの。ものの。ものの



らるてく。ヨス勢を敵とし小血戰し。後者ホハ皆殺せしとども。こゝ為ちとうハ虎口を脫るてく。やうやく瀧田へ立ろるホ。安西ゞ大軍充滿くたゝ攻圍む最中ろのまゝ城に入ると竟よかなのゝど。せゝくく堀内貞行よ一臂の力を戮せん。とく。東條へまりゆくホ彼処も甚戸納平ホゞ大軍ホ圍れく。篭中のるホ異なく後ゞ輒く城へ入るべくもあらぬど。かくそと知ぬゞ瀧田みて一騎なるもとも敵を移とり。城の橋を梳ゆーく。討死をさべりしよ今ハ悔どもその甲斐なし。大事のれん使とゞ損ーく。剌主君の先途よ為立びとゝや西城の圍釋く君恙なのいやうちゞとも。そのと死行の面目ありく。又系よ入くるべ死甚戸ゞ陣へうけ入く戰死せん。と只管ホ早尚をみづから推落めて。ゆ出ひろ尼ゆう。つゞ為ちとろ弦りく。数百騎なる敵軍へうけ四ゞ鷄卵をりく石を厭ゞ。そまとりとろ尼墓なる所行へ命を捨くも敵よ損なく。貞行よ益るの死

るのるまゝ具彼以不忠なるべ。西城素よりゝ兵粮之ー鎌倉へ推寄ようく成。氏朝臣へ急弦告援兵を乞貸ーく。敵戎拂ひ尼と釋バ。こゝ誤とゝ覓る。因ゞをこれるまゝのあらじ。速よ鎌倉へ赴ゞやと尋思ん白濱ゝ。後ハ。そく。日なゝゞ管領の御所へ糸若ー義実の使者と構ゝ素田を境急を告とさく。殺ひ弦乞まうゞ。義実の書翰ゝ見ゞ孤疑せられゝ。ゝ又整ゞ入ゝ。ゝづゝホ日をゝゞ甲斐なく安房へ立ろれゝ景連ハゝゞ滅ひく。一四既よ平均せゝ。ある歟ー。とゝゝふゆゆいよく。帰系ゝ役ハなしさゝとゝ今さゝ腹も切らゞゞ時節を俟ゝ。この條の懈怠を勸解ゝ。ゝれゝゝこの隱宅ゆとく。舊里なるゞゝ上総ゝ。ある。天羽の関村へ赴く外祖一作が親族なる。百姓某甲ゝ家よ身を寓せ一年あまりをる程よ伏姫のゝ子犬ゝ成ゝ。ゝく八房の犬よ伴ゞ富山の奥へ入りゝ入しゝゝ。安危存亡定ゝなゝゝ





この故に母君はもゝ日ゝそひく。長病なりとて門戸を閉ぢ。客人の息女とて畜生ゝ伴ひ
ゝ大痺ゆゝくうゝ驚死君失言ゝ上こゝ正しく客人の息女とて畜生ゝ伴ひ
さらの人の口の外ゝかくまゝいと朽をし。件の犬ゝ霊怪ゝ神通をるこゝ元
ゝ怪ゝかくゝ死ゝやゝ。これ彼山ゝ引登り。八房の犬を殺して姫君を倶し奔る。
瀧田へ入ゝ八重垣ゝ賠結ゝとゝもゝ先非式。ゝ三年ゝ疑ひなしとゝ
もゝゝ尋思ゝ投宿のあゝ心形あゝ社系ゝ実しゝ安房ゝひとし
ら。竊ゝ安房へ立入ゝ。准估の者ゝ引捉つ。富山の奥ゝかくし入りて。伏姫の
ゝ所在を其処ゝ長処ゝと雲れ入山路ゝ暮し。山路ゝ明して五六日を経て籠
ゝ谷川の向ひゝ八ゝとゝ。とゝやと騒ぐ。胸を結ぶ。水除ゝ
つゝゝくつゝくとゝゝ女子の経読む声いとも幽ゝ聞えけり。
作者云この後八犬士の起るべき所以ゝ演記しく。肇集五巻の尾と

定め。既ゝ首巻ゝ十回の題目を載るとゝ。どゝもゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ちくちくつゝ巻の張数ゝ盈つ。今この限を率居ゝ。ゝ巻数ゝ
定ゝあり。又張数ゝ限りあり。毎編ゝ三ゝ。ゝ八賣買に便宜
ゝゝとゝゝ書肆ゝ。ゝ推辞ゝ。ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
嗣出さん。大約ゝ。ゝ演ゝ。ゝ。ゝ小説ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
世ゝ出べきゝ及び。この後又年式。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
約束ありて竟ゝ里見の家臣ゝ。ゝ八人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

編述 曲亭馬琴稿本

總卷淨書 千形仲道謄寫

出像 柳川重信畫

繡像剞劂 朝倉伊八郎刊

○曲亭新著出像圖字小説畧目

袈裟御前七條法語 八犬士傳を著すとき編述するに当りて此書を撰出せり。故に此則の念ひあり。故に亦復書名紙生じ

美濃舊衣八丈縞談

○馬琴画賛扇并ニ家傳神女湯○精製袷衣きもの丸○婦人つゞ虫の妙薬ホ大坂心斎橋筋唐物町河内屋太助方ゆあり扇八江戸神田鍋町柏屋半蔵方ゆあり

朝夷巡嶋記 初編 川貴廣戸 巻

この書久しく稿名を稿せしが今号初め二編遅滞なく出板

南總里見八犬士傳第二集五巻 嘉永の末年遅滞なく開板すと

文化十一年歳次甲戌

十返舎唐物町南八丁目 林太郎

江戸馬食町三丁目 若林清兵衛

竹書肆

町三丁目 平林庄五郎

[illegible]平永町 山崎平八

冬十一月吉日發販

大阪
河内屋喜兵衛
同
伊丹屋善兵衛
同
敦賀屋九兵衛
同
秋田屋太右エ門
同
河内屋茂兵衛
同
河内屋和助
同
秋田屋市兵衛
西京
出雲寺文次郎
同
村上勘兵衛
同
勝村治右衛門
同
杉本甚助

東京
須原屋茂兵衛
同
山城屋佐兵衛
同
小林新兵衛
同
丸屋善七
同
和泉屋市兵衛
同
須原屋伊八
同
出雲寺萬治郎
同
概屋喜兵衛
同
辺江屋半七
同
長門屋龜七
同
三家村佐平

名山閣
東京芝大神宮前書舗
和泉屋吉兵衛發售

五